

『硬質の書』(二)



中村素堂先生の書齋前庭

このごろは趣味的な純日本風の建築以外、生活の場として家は全く洋式か和洋折衷などになって、ひと問くらの椅子式の室を作るのが当然のようになると、日本独特の芸術品鑑賞の専門の空間であった「床の間」をアッサリ捨てたのも、目につくようになってきたようだ。

でもやはり、日本美術品をどこかに置きたいとあって、書も画も壁であれば玄関でも食堂でも懸け上部に空間のある家具や隅棚を、生活の中の美、教養としてなど日本の装飾品も時運の推移の中で、場所も形式も変わってきている。そしてそれはそれなりにまたなかなか良い調和を作っている。
そこで前述の展覧会書作品も、油絵などに伍して適当に所を得ている姿も見られるし、作者として制作する側からも、そういう構想に立って制作している場合も少なくないようである。

茶室のような狭い室が、茶掛けのような小品様式を生んだのと同じように、ホールに置く書、椅子によってコンクリートの壁面で見せる額、鑑賞上の視距離も随分違ってきている。
そこで、むかしでも幟を書くとか、あるいは社、寺、会堂など規模の大きい場所に置かれるもの、屏風、襖のようなものの書いたのを見ると、故人もそれ相応に気構えて筆致の上に工夫をされているのを知っている。

現代書道を研究し推進しておられる進歩的な諸先生が、已にいろいろの研鑽をしておられるのも承知しているが、特にそういう意識を強調されているとも思えないでも、この古典尊重の書の世界が、

墨量の多い重厚な仮名作品、読みやすく今日の詩感にも翹える現代詩文の強靱な筆致、そして思いなしか古典的漢字作品のようなものも広い視距離、硬質な壁にハーモニイする作品へと推移しているように思われる。

これがみずから硬質な表装への妥当性を認めさせてくれるのではないかと思われる。そしてこれは今日の書作品にとつて、おのずからではなく自覚の上に立って考究し制作してみることも大切だと思う。しかしこれは古典的趣致一擲の話などではない。

こんなに書道が盛んになっている時に、そして現代意を十分検討して制作しておられる方々もある中で、ひとつ硬質の書というものを考えてみて、どうだろうか、愚意を書き記してみた次第である。

〔書の四季〕昭和五十二年九月



「認驢作馬」 一昭和47年一

〔筆間雜記〕中村素堂隨筆集昭和六十三年刊より転載。